

福島日仏協会令和元年度総会開催



令和元年5月24日、ザ・セレクトン福島で、福島日仏協会令和元年度総会を会員38名（書面出席62名）出席のもと開催した。瀬谷俊雄理事長より「元号が改まり福島日仏協会の活動が会員相互の親睦と日仏国友好のお役にたつよう皆さんの協力をお願いしたい。6月1、2日は東北絆祭りが福島で開催されるので私も一観衆として沿道で応援します。」と挨拶があった。



議長席に瀬谷理事長が着き、議事審議に入った。平成30年度事業内容、収支決算、貸借対照表の報告があった。収支決算では少額の黒字となり正味財産の一金額が減少したこと、次年度事業計画では会員増加に努めて受取会費を増やすこと、フランス語会話教室の生徒数増加策として初心者向け期間限定集中講座の開講や、料理教室では2教室維持に努めてフランス料理の普及に貢献することの計画を折り込んだ収支予算書の発表があった。役員改選では鈴木秀雄氏、本田久美子氏の監事2名が4年の任期で再任された。議案審議終了後、福島市国際交流協会会長代理で出席された福島市市民・文化スポーツ部部長横田博昭氏から祝辞をいただいた。

総会記念講演会では、福島民報社専務取締役編集主幹芳見弘一氏が、演題「古関祐而は福島の『宝』」で話され、福島が生んだ偉大な作曲家の現在も歌われている名曲の紹介と、古関ご夫妻がNHK朝ドラ主人公に決定の朗報や、学校校歌、特に県内109校に及ぶ作曲の功績を称えられた。又欧州各国を高校生帯同で視察された際に、現地での被災に負けない生徒たちに対する厚い支援に感激したことなど、わかりやすく説明された。

懇親会に移り、在仙台フランス名誉領事佐藤万里子氏から祝辞をいただき、乾杯の発声は福島民友新聞社代表取締役社長五阿弥宏安氏がつとめ、令和最初の宴は時間の過ぎるのも忘れるほど和やかなムードで進行して、樋口郁雄理事の一本締めで幕を閉じた。

はじめてフランス語を学ぶ「会話教室初心者生徒さん募集中」

開講日 7月～9月3ヶ月 土曜日8回

場所 福島県林業会館1F会議室
県庁前バス停から徒歩3分、福島駅から徒歩8分

時間 毎回10時～11時

講師 イザベル・サード先生
(アリアンス・フランセーズ仙台所属)
仏国南部マルセイユ出身

授業料 合計16,000円(一括先払い) 教材込み ※学割料金に準じています。

定員 8名まで ※4名以下は開講しません。

申し込み 期限6月21日(金) 電話/FAX 024-522-2407

福島日仏協会事務局(インドウ)まで

「受講申込用紙」を郵送します。

開講理由 生徒さんのクラス異動で、初心者入門コースの時間が9月まで空きましたので、先生のご好意で8回限定授業を募集します。中高生や、初めてのフランス旅行計画中の方に適しています。

主催 一般社団法人福島日仏協会



日程表 8回	
7月	6日、20日、27日
8月	3日、24日、31日
9月	14日、21日

私のフランス語日記

Au mois de février de cette année, « le Hayabusa 2 » de la JAXA (Japan Aerospace Exploration Agency), une machine volant dans l'espace pour rechercher des petites planètes, a réussi à atterrir sur la petite planète « Ryugu » qui se trouvait 300 millions de km de la Terre. Ça a été un grand succès ! Selon les nouvelles, elle reviendra sur la Terre avec de la matière souterraine de cette planète à la fin de l'année prochaine.

À propos, la « Ryugu », quel est son ordre de grandeur? En effet, on dit que ça ne mesure que 900 m de diamètres. Ça me rappelle les astéroïdes qui sont habités par un roi, un buveur, un géographe, etc. dans la nouvelle « Le petit prince » de Antoine de Saint-Exupéry.

Mais, j'ai entendu dire que malgré cette petitesse, cette planète avait une importance inestimable dans le monde de la science. On dit que la « Ryugu » contient beaucoup de matières organiques, comme du carbone par exemple. On a confirmé la présence d'eau grâce à la recherche à laquelle ont contribué les techniques de pointe de l'université d'Aizu dans la préfecture Fukushima (en tant qu'habitant de la préfecture, je suis fier et content de la grande activité de l'université). J'ai entendu dire que l'origine des êtres vivants sur la Terre pourrait être liée à ces sortes de petites planètes lointaines dans l'espace.

Avant que le petit prince revienne sur sa planète, il a dit au pilote de l'avion, le héros de la nouvelle : « Quand tu regarderas le ciel, la nuit, puisque j'habiterai dans l'une d'elles (les étoiles), puisque je rirai dans l'une d'elles, alors ce sera pour toi comme si riaient toutes les étoiles. » C'est une de mes phrases favorites dans la nouvelle. En ce qui me concerne, grace au projet « Hayabusa 2 », je pourrai avoir la sensation d'être entouré par les liens mystérieux de la vie qui dure depuis des milliards d'années juste en regardant le ciel nocturne.

un élève au cours de la conversation en français :

Chizuo Hayashi

今年の2月、小惑星探査機、JAXA(Japan Aerospace Exploration Agency)の「はやぶさ2」が地球から3億 km かなたにある小惑星「りゅうぐう」に無事着陸した。これは快挙だ! ニュースによると、来年の末にはその星の地下物質を地球に持ち帰ってくる予定だという。



JAXA 資料より

ところで、小惑星「りゅうぐう」ってどのくらいの大きさ? 実は直径900mしかないのだそうだ。サン・テクジュペリの「星の王子様」に出てくる、王様や呑み助や地理学者などが住む小さな星のことを思い出してしまう。

でも、小さくてもその学術的な意味は計り知れないのだそうだ。「りゅうぐう」は炭素などの有機物を多く含んでいるとされる。福島県の会津大学の先端技術が貢献した今回の調査で、水の存在も発見された(福島県民の一人として、地元の大学の活躍は誇らしく、嬉しい)。地球の生命の源がこうした宇宙のはるかかなたの星にあるのかもしれないという。



星の王子様は、自分の星に帰る前に主人公のパイロットに言った。

「ぼくは無数の星のうちの一つに住むんだ。無数の星のうちの一つで笑うんだ。だから、きみが夜、空を見上げると、さながらあらゆる星が笑っているみたいだろう。」と。これは、

この本の中で僕が気に入っているフレーズのうちのの一つ。僕はといえば、「はやぶさ2」のプロジェクトのおかげで、夜空を見上げると、何十億年にもわたる生命の不思議な繋がりに包まれているような思いを持つようになるかもしれない。

会話教室受講生 林 千鶴雄

次回は佐藤淳子さん、お願いします!

art 諸橋近代美術館 開館20周年記念展 vol.2

「四次元を探しに-ダリから現代へ」

晩年のダリは DNA や原子物理学に強い関心を抱き、反物質世界の表現への旺盛な探求心を決して失うことはありませんでした。また、彼は自著において「すでに現代絵画以降に、勇気あるグループが、全速力で絶対無つまり神秘主義前派的精神状態にとっての条件の縁に突進した」と書いています。本展はこの言葉を手掛かりに、ダリをメインとするコレクションと現代美術が織り成す新たな美のエネルギー領域を探る展覧会です。



渡辺えつこ
《Blue - Red - Yellow_White House》
2018年
©MasaruYanagiba

会 期 2019. 7.13 (土) ~11.24 (日) 会期中無休
時 間 9時30分~17時30分 ※11月は17時まで
観覧料 一般950円、大学生・高校生500円、中学生以下無料
住 所 北塩原村桧原字剣ヶ峯 1093-23
電 話 0241-37-1088

「マニユエル・ルグリ Stars in Blue~Ballet & Music~」を鑑賞して

3月上旬、春のうらかな風がふくころ、バレエを、いや芸術を心から愛する人々のために、特別な舞台が用意された。世界最高峰と名高いパリ・オペラ座の頂点に長きに渡り君臨したバレエ界のレジェンド“マニユエル・ルグリ”と、彼が呼び寄せた著名なダンサーたち、そして日本人の気鋭演奏家たちとのダンスコンサートだ。

場所は東京芸術劇場。青空が一面に広がるガラス張りの吹き抜けと、荘厳なパイプオルガンが印象的なコンサートホールが現れる。バレエの舞台といえば、豪華な舞台セット、客席との高低差、オーケストラピットによって、現実世界と切り離され、人は神々しいその雰囲気酔いに酔いしれる。しかし、今回私はホールの扉を開き、明らかにいつもとは違う雰囲気に驚いた。舞台にはグランドピアノが一つあるだけ、そして舞台が目の高さより低く、客席と舞台の近さはわずか数十センチ…数分後には、驚くほど近さで、ルグリや、今をときめくダンサーたちが目の前に現れる。客席にいた誰もが胸を高鳴らせていただろう。

その静かな熱気を包み込むように、田村響によるラフマニノフの「ソナタ」で幕が開いた。寄り添うように、舞台袖から現れたのは、今回初共演となるシルヴィア・アツツオーニ(ハンブルク・バレエ団 プリンシパル)とセミヨン・チュージン(ロシアポリショイ・バレエ団 プリンシパル)。

この作品にはストーリーはなく、切なくも、豊潤なラフマニノフの旋律を、抽象的な愛のパドドウに仕立てた作品である。ストーリーがないにも関わらず、二人が舞台上に現れて間もなく、自然と涙が溢れ出てきた…全身からほとばしるような輝きを放つアツツオーニをみていると、不思議と全身の力が抜けていき、音楽に溶け込んでいくようなそんな感覚に陥った。二人の一挙手一投足すべてが美しく、それが台詞となって観るものを、惹きつける。「魂は細部に宿る」とはこのことだろう。初共演とは思えない、二人の瑞々しいダンスは、バレエの魅力を存分に伝えてくれた。

そんな柔らかな印象と対照的に、観るものに強烈なインパクトを与えたのが、「瀕死の白鳥」だ。名だたる伝説のバレリーナたちが踊ってきたこの作品を踊るのは、ポリショイ・バレエの若きプリンシパル オルガ・スミルノワ、そして演奏はこちらも日本が世界に誇る若きヴァイオリニスト三浦文彰だ。この作品の醍醐味は、バレリーナの人生や、生き様を、静かに死にゆく白鳥の儚さに投影すること。しかし、スミルノワは、それと一線を画する、圧倒的リアリズムでもって魅せたのだ。長い手腕は、荒々しくも繊細に羽ばたく羽と化し、彼女の肉体に一羽の白鳥が憑依しているかのよう。迫り来る死に立ち向かう、生命力に満ちた白鳥そのものだった。伝説的なバレリーナが踊り継いできたこの作品を、決して背伸びすることなく、されど想像をはるかにこえる表現力で演じきったのは圧巻である。三浦文彰の深く繊細な旋律と、スミルノワの迫真の舞いにしばらくその余韻が会場を埋め尽くした。若くしてトップに上り詰めた二人だからこそ、作り上げられた空間かもしれない。

そして、今回の公演のメイン演目であり、世界初演の「OCHIBA」ルグリがスミルノワとの共演を熱望し、本公演のために振り付けられたこの作品は、日本と西洋を舞台に交わることのない静かな愛をテーマにした10分ほどの作品である。

～あらずじ～物語の舞台は19世紀。美しい絹を紡ぐための蚕の卵を母国に持ち帰るために、ひとりのフランス人が日本に到着する。出会った武将の膝下に横たわる若い女性に、彼は恋をしてしまう。彼は何度も旅を繰り返すものの、ふたりは言葉を変えずともなく、触れあうこともなく、感情の交換もなく……。

薄い絹の衣装をまとったスミルノワが舞台下手(しもて)に膝を揃えて横たわり、そして紳士ルグリが舞台上手(かみて)にゆっくりと現れる。ルグリ扮する紳士は内なる情熱を閉じ込めるように、スミルノワ扮する東洋の美女は、そんな想いを寄せる男性がいることなど知らない、いやむしろ実体のない幻のように、二人は趣の異なるダンスをゆっくりと踊る。少しずつ二人は近づき、静かなパドドウが始まるが、決して二人の視線があうことはなく、美女は紳士の腕をすっとすり抜けていく。

音楽には現代音楽の父とも評されるフィリップ・グラスの曲が用いられ、一定のフレーズが尽きることのない流れのように繰り返し反芻される。何度も近づくが決して先に進むことはないこの沈黙の愛と見事に重なる。超絶技巧も、ダイナミックな表現もないが、ルグリが腕を伸ばした先、視線の先に確かに物語がある。40年のキャリアが生む、成熟の舞は、誰がどうあがいても手に入ることができない。身体の極限までバレエの美学を追求し、到達した境地は、開放的で挑戦的な場所なのかもしれない。ルグリは自らがつくるこの心地よい空間を、噛みしめるように踊っていた。

カーテンコールは、今まで見たことがないほどの観客総立ちのスタンディングオベーションで、レバランスをするたびに歓喜の音が響き、拍手が鳴り止まなかった。

豪華な舞台セットや衣装は一つもないが、おそらく客席にいた誰もが、今まで感じたことのないような充足感を感じていただろう。日本を代表する音楽家と、世界のトップダンサーと、そしてルグリが、バレエを心から愛する人のために開いた、ごくごくプライベートなパーティに居合わせているような、そんな至福のひと時だった。

ルグリは来年2020年に10年務めたウィーン国立歌劇場バレエ団芸術監督の座を退く。次はどんなステージが彼を待っているのか、様々な憶測が飛び交っているが、きっと、次なるキャリアもルグリらしく軽やかに、しなやかに駆け抜けていくのだろう。

そんなルグリが、また日本に帰ってきてくれることを願い、この心温まる舞台のレビューを終えたいと思う。

Bravo Manuel !!! Et merci pour tout ce bonheur....

齋藤めぐみ(福島すみれバレエ学園)



カーテンコールの様子
左からスミルノワ、チュージン、
アツツオーニ、ルグリ

久美子の歳時記～Jadore lesgateaux (5)

皆様はバスク地方をご存じでしょうか？スペイン北西部からフランス南西部にまたがる地域で、いまはふたつの国籍に分けられています。独自の言語と文化をもつバスクの人々が国を超え、その伝統と文化を伝えてきました。最近では美食と芸術の街としても人気です。そんなバスク地方を4年ほど前になりますが、旅で知り合った仲間と訪れました。旅を振り返りながら、バスクの魅力を少しだけご紹介いたしましょう。



スペインのビルバオが旅の始まり。そこから海のリゾートでもある、美食の中心地サン・セバスチャンへ。★★★付きレストランも体験しました！バールと呼ばれる立

飲み屋が軒を連ね、洗練された、それは素晴らしいタパスの数々に目も心も奪われました。ガイドブック片手に、もみくちゃになりながら、4軒をはしご！なぜかお寿司屋さんもあり、福島の日本酒が飾られていて感激。

オンダリビアというスペインのはずれの街で魚介の濃厚なスープを頂き、いよいよフランスバスクの川の街バイヨヌへ。カラフルな木組みのバスク建物が立ち並ぶかわいい街。チョコレートがスペイン、ポルトガルから始めてフランスのこの街にもたらされたそうで、チョコレート屋さんがとても有名。そこからルイ14世が

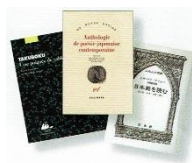
結婚式を挙げたサン・ジャン・ド・リュズへ。ヨーロッパの歴史に興味がありました。こちらはあのマカロン発祥の地です。

スペインバスクが海なら、フレンチバスクは山のバスクでもあります。ラ・リュヌ山の登山列車はレトロな列車でポニーや羊の間を進み、山頂ではバスクの海岸線からピレネー山脈などの、思いがけない絶景に出会いました。次に訪れたフランスで最も美しい村のひとつ、アイノア。中世の雰囲気を感じられる静かな本当にちいさなこの村のレストランが本当においしかったです。この地域は、コロンブスの時代にさかのぼって唐辛子(エスプレット)の生産が盛んで、街中に唐辛子があふれ、あらゆる物に真っ赤な唐辛子がデザインされています。そうそう！チョコレートにも唐辛子です。辛いイメージのないフランス料理ですが、このエスプレットを使った野菜の煮込みや、練り込んだハムや豚肉料理は(辛くはなく、ピーマン、パプリカに近い味)絶品でした。そして最後の目的地ビアリッツからビルバオに戻り、バスクの旅が終わりました。

今回はバスク風チーズケーキの魅力(今、ブームになっている真っ黒なケーキ)をお伝えするつもりが～すみません！旅行記に、それも食べ物ばかりになってしまいました。バスクを代表するガトーバスクと共に次回、お伝えいたします！！(料理教室受講生 本田久美子)

(公財) 日仏会館主催のイベントを紹介します

会場はどちらも日仏会館ホール (130席)
東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 ☎03-5424-1141



6月29日(土)
日仏文化講座 14:00~18:00
日本詩の魅力を再発見する
イヴ＝マリー・アリューへのオマージュ

2018年4月に急逝したイヴ＝マリー・アリューは、40年にわたって中原中也、萩原朔太郎、石川啄木から大岡信、俵万智まで多くの詩人を精力的にフランス語に翻訳・紹介し、日本の近現代詩をフランス語圏の読者に知らしめることに多大な功績を残しました。日仏の詩の翻訳家が、氏の業績を振り返りながら、仏訳を通して見えてくる日本詩の魅力について語ります。

報告者 宇佐美斉(京大名誉教授)、ブリジット・アリュー(翻訳家)、ドミニク・パルメ(翻訳家)、中地義和(東大名誉教授)

参加費 一般 1,000円、学生 500円

申込み 日仏会館ウェブサイトから 又は電話で



7月10日(水)
フランス音楽の夕べ
19:00~21:00
「戸室玄ピアノリサイタル
—プーランクと友人たち」

エリック・サティ:「グノッシェンヌ第5番」
「官能的なソナチネ」(Iアレグロ、IIアンダンテ、IIIヴィヴァッシュ)
クロード・ドビュッシー:「ピアノのために」
(Iプレリュード、IIサラバンド、IIIトッカータ)
フランシス・プーランク:「15の即興曲」(全曲)
モーリス・ラヴェル:「ラ・ヴァルス」
日仏会館と日仏音楽協会が共催するフランス音楽の夕べ

参加費 一般 3,000円、学生 1,500円

申込み 日仏会館ウェブサイトから 又は電話で

